

問ふ、真言亡国とは証文何なる経論に出づるや。答ふ、法華誹謗・正法向背の故なり。問ふ、亡国の証文之無くば、云何に信ずべきや。答ふ、謗法の段は勿論なるか。若し謗法ならば、亡国墮獄疑ひ無し。凡そ謗法とは謗仏謗僧なり。三宝一体なる故なり。是涅槃經の文なり。爰を以て法華經には「則ち一切世間の仏種を断ず」と説く。是を即ち一闡提と名づく。涅槃經の一と十と十一とを委細に見るべきなり。罪に輕重有れば獄に浅深を構へたり。殺生 偷盜等、乃至一大三千世界の衆生を殺害すれども、等活・黒繩等の上七大地獄の因として、無間に墮つる事は都て無し。阿鼻の業因は経論の掟は五逆・七逆・因果撥無・正法誹謗の者なり。但し五逆の中に一逆を犯す者は無間に墮すと雖も、一中劫を経て罪を尽くして浮かぶ。一戒をも犯さず、道心堅固にして後世を願うと雖も、法華に背きぬれば、無間に墮ちて展転無數劫と見えたり。然れば則ち謗法は無量の五逆に過ぎたり。是を以て国家を祈らんに天下將に泰平なるべしや。諸法は現量に如かず。承久の兵乱の時、関東には其の用意もなし。国主として調伏を企て、四十一人の貴僧に仰せて十五壇の秘法を行はる。其の中に守護經の法を紫宸殿にして御室始めて行はる。七日に満ぜし日、京方負け畢んぬ。亡国の現証に非ずや。是は僅かに今生の小事なり。権經邪法に依って悪道に墮ちん事浅猿かるべし。

問ふ、権教邪宗の証文は如何。既に真言教の大日覺王の秘法は即身成仏の奥蔵なり。故に上下一同に是の法に歸し、天下悉く大法を仰ぐ。海内を静め天下を治むる事偏に真言の力なり。然るを権教邪法と云ふ事如何。答ふ、権教と云ふ事、四教含蔵、帯方便の説なる経文顯然なればなり。然らば四味の諸教に同じて、久遠を隠し二乗を隔つ。況んや尽形寿の戒等を述べれば、小乗権教なる事疑ひ無し。爰を以て遣唐の疑問に、禪林寺の広修・国清寺の維鑄の決判分明に方等部の撰と云ひしなり。

疑って云はく、経文の権教は且く之を置く。唐決の事天台の先徳円珍大師之を破す。大日經の指歸に「法華尚及ばず、況んや自余の教をや」云云。既に祖師の所判なり。誰か之に背くべきや。決に云はく「道理前の如し」と。依法不依人の意なり。但し此の釈を智証の釈と云ふ事不審なり。其の故は授決集の下に云はく「若し法華・華嚴・般若等の經に望めば、是撰引門」と云へり。広修・維鑄を破する時は法華尚及ばずと書き、授決集には是撰引門と云って、二義相違せり。指歸が円珍の作ならば、授決集は智証の釈に非ず。授決集が実作ならば、指歸は智証の釈に非じ。今此の事を案ずるに、授決集が智証の釈と云ふ事、天下の人皆之を知る上、公家の日記にも之を載せたり。指歸は人多く之を知らず。公家の日記にも之無し。此を以て彼を思ふに後の人作って智証の釈と号するか。能く能く尋ぬべき事なり。授決集は正しき智証の自筆なり。密家に四句の五

蔵を設けて十住心を立て、論を引き伝を三国に寄せ、家々の日記と号し、我が宗を嚴るとも、皆是妄語胸臆の浮言にして莊嚴己義の法門なり。所詮法華經は大日經より三重の劣・戲論の法にして釈尊は無明纏縛の仏と云ふ事、慥なる如来の金言經文を尋めべし。証文無くんば何と云ふとも法華誹謗の罪過を免れず。此の事当家の肝心なり。返す返す忘失する事勿れ。何れの宗にも正法誹謗の失之有り。対論の時は但此の一段に在り。

仏法は自他宗異りと雖も、翫ぶ本意は道俗・貴賤共に離苦得樂・現当二世の爲なり。謗法に成り伏して惡道に墮つべくは、文殊の智慧・富樓那の弁説一分も無益なり。無間に墮つる程の邪法の行人にて国家を祈禱せんに將た善事を成すべきや。顯密対判の積は且く之を置く。華嚴に法華劣ると云ふ事、能く能く思惟すべきなり。

華嚴經の十二に云はく四十華嚴「又彼の所修の一切功德、六分の一常に王に属す。是くの如く修及び造を障る不善所有の罪業、六分の一還つて王に属す」文。六波羅蜜經の六に云はく「若し王の境内に殺を犯す者有れば、其の王便ち第六分の罪を獲ん。偷盜・邪行及び妄語も亦復是くの如し。何を以ての故に、若しは法も非法も王爲れ根本なれば、罪に於ても福に於ても、第六の一分は皆王に属するなり」云云。最勝王經に云はく「惡人を愛敬し善人を治罰するに由るが故に、他方の怨賊来たり国人喪乱に遭はん」等云云。大集經に云はく「若し復諸の刹利國王、諸の非法を作し、世尊の聲聞の弟子を惱亂し、若しは以て毀罵し、刀杖もて打斫し、及び衣鉢種々の資具を奪ひ、若しは他の給施に留難を作す者有らば、我等彼をして自然に卒に他方の怨敵を起さしめ、及び自国の土にも亦兵起・病疫・飢饉し、非時に風雨し鬪諍言訟せしめ、又其の王をして久しからずして、復當に己が國を忘失すべからしむ」云云。大三界義に云はく「爾の時に諸人共に聚まりて、衆の内に一人の有徳の人を立て、名づけて田主と爲し、而して各所収の物六分の一を以て、以て田主に貢輸す。一人を以て主と爲し、政法を以て之を治む。茲に因つて以後、刹利種を立て、大衆欽仰して、恩卒土に流る。復大三末多王と名づく」

已上俱舎に依りて之を出だすなり。

顯密の事。無量義經十功德品に云はく第四功德の下「深く諸仏秘密の法に入り、演説すべき所違ひ無く失無し」と。

抑大日の三部を密教と云ひ、法華經を顯教と云ふ事、金言の出る所を知らず。所詮真言を密と云ふは、是の密は隱密の密なるか。微密の密なるか。物を秘するに二種有り。一には金銀等を蔵に籠むるは微密なり。二には疵片輪等を隠すは隱密なり。然れば則ち真言を密と云ふは隱密なり。其の故は始成と説く故に長壽を隱し、二乗を隔つる故に記小無し。此の二つは教法の心髓、文義の綱骨なり。微密の密は法華なり。然れば則ち文に云はく、四の卷法師品に云はく「藥王、此の經は是諸仏秘要の蔵なり」云云。五

の卷安樂行品に云はく「^{もんじゅしり}文殊師利、此の法華經は諸仏如来秘密の蔵なり。諸經の中に於て最も其の上に在り」云云。寿量品に云はく「如来秘密神通之力」云云。如来神力品に云はく「如来一切秘要之蔵」云云。^{しかのみならず}加之真言の高祖^{りゅうじゅ ぼさつ}竜樹菩薩、法華經を秘密と名づく、^{にじょうさぶつ}二乗作仏有るが故にと釈せり。次に二乗作仏無きを秘密とせずば真言は即ち秘密の法に非ず。^{ゆえん いか}所以は何ん。大日經に云はく「^{そうどう}仏不思議真言相道の法を説いて、一切の声聞・縁覺を共にせず。亦世尊^{あまね}普く一切衆生の為にするに非ず」云云。二乗を隔つる事、前四味の諸教に同じ。^{したが}随つて唐決には方等部の撰と判ず。經文には四經含蔵と見えたり。

大論の第百卷に云はく^{第九十品を釈す}「問うて曰く、更に何れの法か甚深にして、般若に勝れたる者有つて、般若を以て阿難に囑累し、而も余經をば菩薩に囑累するや。答へて曰く、^{はらみつ}般若波羅蜜は秘密の法に非ず。法華等の諸經に阿羅漢の受決作仏を説いて大菩薩能く^{じゅう}受用す。譬へば大薬師の能く毒を以て薬と為すが如し」等云云。玄義の六に云はく「譬へば良医の能く毒を変じて薬と為すが如く、二乗の根敗反復すること能はず。之を名づけて毒と為す。今經に記を得るは即ち是毒を変じて薬と為す。故に論に云はく、余經は秘密に非ずとは法華を秘密と為せばなり。復本地の所説有り、諸經に無き所、後に在つて当に広く明かすべし」云云。籤の六に云はく「第四に引証の中、論に云はく等と言ふは、大論の文証なり。秘密と言ふは八教の中の秘密には非ず。但是前に未だ説かざる所を秘と為し、^{かい お}開し已はつて外無きを密と為す」文。文句の八に云はく「方等・般若に実相の蔵を説くと雖も、亦未だ五乗の作仏を説かず。亦未だ^{ほっしゃくけんぼん}発迹 顕本せず。頓漸の諸經は皆未だ^{ゆうえ}融會せず。故に名づけて秘と為す」文。記の八に云はく「大論に云はく、法華は是秘密、諸の菩薩に付すと。今の下の文の如きは下方を召して尚本眷屬を待つ。驗^{しゅうく}けし余は未だ堪へず」云云。秀句の下に「^{しんく}竜女の成仏を釈して、身口密なりと云へり」云云。此等の經・論・釈は、^{ぶんみょう}分明に法華經を諸仏は最第一と説き、秘密教と定め給へるを、經論に文証も無き妄語を吐き、法華を顕教と名づけて之を下し之を^{ぼう}謗ず。豈大謗法に非ずや。

抑^{そもそも}唐朝の善無畏・^{ぜんむい}金剛智等、^{こんごうち}法華經と大日經の両經に、^{りどうじしゅう}理同事勝の釈を作るは、^{ほんか}梵華両国共に勝劣か。法華經も天竺には十六里の宝蔵に有れば無量の事有れども、^{りゅうさ}流沙・^{そうらい}葱嶺等の^{けんなん}險難、^{るじょうい}五万八千里十万里の路次容易ならざる間、^{にく}枝葉をば之を略せり。此等は併しながら訳者の意樂に随ふ。広を好み略を悪む人も有り。略を好み広を悪む人も有り。然れば則ち、玄奘^{げんじょう}広を好んで四十卷の般若經を六百卷に成し、羅什^{らじゅうさんぞう}三蔵は略を好んで千卷の大論を百卷に縮めたり。印契・^{いんけい}真言の勝るゝと云ふ事、是を以て弁^{わきま}へ難し。羅什^{しやく}所訳の法華經には是を宗とせず。不空^{ふくうさんぞう}三蔵の法華儀軌には印・真言之有り。^{にんのうきょう}仁王經も羅什の所訳には印・真言之無し。不空、所訳の經には之を副^そへたり。知んぬ是訳者の意樂なりと。其の上法華經には「^{いせつじつそういん}為説実相印」と説いて、合掌の印之有り。譬

喩品には「我が此の法印は世間を利益せんと欲するが為の故に説く」云云。此等の文如何。只広略の異なりあるか。又舌相の言語皆是真言なり。法華經には「治生の産業は皆実相と相違背せず」と宣べ、亦「是前仏經中に説く所なり」と説く。此等は如何。真言こそ有名無実の真言、未顕真実の権教なれば、成仏得道跡形も無し。始成を談じて久遠無ければ、性徳本有の仏性も無し。三乗が仏の出世を感ずるに、三人に二人を捨て、三十人に二十人を除く。「皆仏道に入らしむ」の仏の本願満足すべからず。十界互具は思ひもよらず。まして非情の上の色心の因果争でか説くべきや。然れば陳隋二代の天台大師が法華經の文を解りて、印契の上に立て給へる十界互具百界千如一念三千を、善無畏は盗み取りて我が宗の骨目とせり。彼の三蔵は唐の第七玄宗皇帝の開元四年に来たる。如来入滅より一千六百六十四年か、開皇十七年より百二十余年なり。何ぞ百二十余年已前に天台の立て給へる一念三千の法門を盗み取りて我が物とするや。而るに己が依經たる大日經には、衆生の中に機を簡ひ、前四味の諸經に同じて二乗を簡へり。まして草木成仏は思ひもよらず。されば理を云ふ時は盗人なり。又印契・真言何れの經にか之を簡へる。若し爾れば大日經に之を説けども規模ならず。一代に簡はれ諸經に捨てられたる二乗作仏は法華に限れり。二乗は無量無辺劫の間、千二百余尊の印契・真言を行ずとも、法華經に値はずんば成仏すべからず。印は手の用、真言は口の用なり。其の主が成仏せざれば口と手と別に成仏すべきや。一代に超過し、三説に秀でたる二乗の事をば物とせず。事に依る時は印・真言を尊む者、劣謂勝見の外道なり。

無量義經説法品に云はく「四十余年未顕真実」文。一の巻に云はく「世尊は法久しくして後要らず当に真実を説きたまふべし」文。又云はく「一大事の因縁の故に世に出現したまふ」。四の巻に云はく「薬王今汝に告ぐ、我が所説の諸經あり而も此の經の中に於て法華最も第一なり」文。又云はく「已に説き今説き当に説かん」文。宝塔品に云はく「我仏道を為つて無量の土に於て始めより今に至るまで広く諸經を説く。而も其の中に於て此の經第一なり」文。安樂行品に云はく「此の法華經は是諸の如来第一の説なり。諸經の中に於て最も為れ甚深なり」文。又云はく「此の法華經は諸仏如来秘密の蔵なり。諸經の中に於て最も其の上に在り」文。薬王品に云はく「此の法華經も亦復是くの如し。諸經の中に於て最も為れ其の上なり」文。又云はく「此の經も亦復是くの如し。諸經の中に於て最も為れ其の尊なり」文。又云はく「此の經も亦復是くの如し。諸經の中の王なり」文。又云はく「此の經も亦復是くの如し。一切の如来の所説、若しは菩薩の所説、若しは声聞の所説、諸の經法の中に最も為れ第一なり」等云云。玄の十に云はく「又已今当の説に最も難信難解と為す、前經は是已説なり」文。秀句の下に云はく「謹んで案ずるに法華經法師品の偈に云はく、薬王今汝に告ぐ、我が所説の諸經あり。而も此の經の中に於て法華最も第一なり」文。又云はく「当に知るべし已説は四時の經なり」文。文句の八に云はく「今法華は法を論ずれば」云云。記の八に云はく「鋒

に当たる」云云。秀句の下に云はく「明らかに知んぬ他宗所依の經は是王中の王ならず」云云。釈迦・多宝・十方の諸仏、天台・妙樂・伝教等は法華經は眞實、華嚴經は方便なり。「未顕眞實」「正直捨方便」「不受余經一偈」「若し人信ぜずして乃至其の人命終して阿鼻獄に入らん」と云云。弘法大師は「法華は戲論、華嚴は眞實なり」云云。何れを用ふべきや。宝鑰に云はく「此くの如き乗々は自乗に名を得れども後に望めば戲論と作す」文。又云はく「謗人謗法は定めて阿鼻獄に墮せん」文。記の五に云はく「故に実相の外は皆戲論と名づく」文。梵網經疏に云はく「第十に謗三宝戒。亦是謗菩薩戒と云ひ、或は邪見と云ふ。謗は是乖背の名なり。誑は是解、理に稱はず。言は實に当たらずして異解して説く者を皆名づけて謗と為すなり」文。玄の三に云はく「文証無きは悉く是邪偽にして彼の外道に同じ」文。弘の十に云はく「今の人他の所引の經論を信じて謂ひて憑み有りとして宗の源を尋ねず。謬誤何ぞ甚しき」文。守護章上の中に云はく「若し所説の經論明文有らば、権實・大小・偏円・半満を簡択すべし」文。玄の三に云はく「広く經論を引きて己義を莊嚴す」文。

抑 弘法の法華經は眞言より三重の劣、戲論の法にして尚華嚴にも劣ると云ふ事、大日經六卷に供養法の卷を加へて七卷三十一品、或は三十六品には何れの品何れの卷に見えたるや。加之蘇悉地經三十四品、金剛頂經三卷三品、或は一巻に全く見えざる所なり。又大日經並びに三部の秘經には、何れの卷何れの品にか十界互具之有りや。都て無きなり。法華經には事理共に有るなり。所謂久遠實成は事なり。二乗作仏は理なり。善無畏等の理同事勝は臆説なり。信用すべからざる者なり。凡そ眞言の誤り多き中に、一、十住心に第八法華・第九華嚴・第十眞言云云。何れの經論に出でたるや。一、善無畏の四句と弘法の十住心と眼前の違目なり。何ぞ師弟敵対するや。一、五蔵を立つる時、六波羅蜜經の陀羅尼蔵を、何ぞ必ず我が家の眞言と云ふや。一、震旦の人師争つて醍醐を盗むといふ。年紀何ぞ相違するや。其の故は開皇十七年より、唐の徳宗の貞元四年戊辰の歳に至るまで百九十二年なり。何ぞ天台入滅百九十二年の後に渡れる六波羅蜜經の醍醐を盗み給ふべきや。顕然の違目なり。若し爾れば人を謗じ法を謗ず、定んで阿鼻獄に墮すと云ふは自責なるや。一、弘法の心經の秘鍵の五分に何ぞ法華を撰するや。能く能く尋ぬべき事なり。

眞言七重難。一、眞言は法華經より外に大日如来の所説なり云云。若し爾れば大日の出世・成道・説法・利生は釈尊より前か後か、如何。対機説法の仏は八相作仏す。父母は誰ぞ。名字は如何。娑婆世界の仏と云はゞ、世に二仏無く国に二主無きは聖教の通判なり。涅槃經の三十五の卷を見るべきなり。若し他土の仏なりと云はゞ、何ぞ我が主師親の釈尊を蔑ろにして他方疎縁の仏を崇むるや。不忠なり、不孝なり、逆路伽耶陀なり。若し一体といはゞ何ぞ別仏と云ふや。若し別仏ならば、何ぞ我が重恩の仏を捨つ

るや。唐堯は老ひ衰へたる母を敬ひ、虞舜は頑なる父を崇む^是。六波羅蜜經に云はく「所謂過去無量殑伽沙の諸仏世尊の所説の正法、我今亦当に是くの如き説を作すべし。所謂八万四千の諸の妙法蘊、而も阿難陀等の諸大弟子をして一たび耳に聞きて皆悉く憶持せしむ」云云。此の中の陀羅尼蔵を弘法は我が真言と云へる。若し爾れば此の陀羅尼蔵は釈迦の説に非ざるか。此の説に違す^是。凡そ法華經は無量千万億の已説今説当説に最第一なり。諸仏の所説・菩薩の所説・声聞の所説に此の經第一なり。諸仏の中に大日漏るべきや。法華經は正直無上道の説、大日等の諸仏長舌を梵天に付けて真実と示し給ふ^是。威儀形色經に「身相黄金色にして常に満月輪に遊び定慧智拳の印法華經を証誠す」と。又五仏章の仏も法華經第一と見えたり^是。「要を以て之を言はゞ如来の一切所有の法、乃至皆此の經に於て宣示顯説す」云云。此等の經文は釈迦所説の諸經の中に第一なるのみに非ず、三世の諸仏の所説の中に第一なり。此の外一仏二仏の所説の經の中に、法華經に勝れたる經有りと云はゞ用ふべからず。法華經は三世不壞の經なる故なり^是。又大日經等の諸經の中に法華經に勝るゝ經文之無し^是。釈尊御入滅より已後、天竺の論師二十四人の付法蔵、其の外大権の垂迹、震旦の人師、南三北七の十師、三論法相の先師の中に、天台宗より外に十界互具百界千如一念三千と談ずる人之無し。若し一念三千を立てざれば性惡の義之無し。性惡の義無くば仏菩薩の普現色身、真言兩界の曼荼羅、五百七百萬の諸尊は、本無今有の外道の法に同ぜんか。若し十界互具百界千如を立てば、本經何れの經にか十界皆成の旨之を説けるや。天台宗見聞の後、邪智莊嚴の為に盗み取れる法門なり。才芸を誦し、浮言を吐くには依るべからず。正しき經文金言を尋ぬべきなり^是七。

涅槃經の三十五に云はく「我処々の經の中に於て説いて言はく、一人出世すれば多人利益す。一国土の中に二の轉輪王あり。一世界の中に二仏出世すといはゞ是の処有ること無し」文。大論の九に云はく「十方恒河沙三千大千世界を名づけて一仏世界と為す。是の中に更に余仏無し。實には一の釈迦牟尼仏なり」文。記の一に云はく「世に二仏無く国に二主無し。一仏の境界に二の尊号無し」文。持地論に云はく「世に二仏無く国に二主無し。一仏の境界に二の尊号無し」文。

七月 日

日 蓮 花 押